



和の世紀を築こう

会長 安田 浩

明けましておめでとうございます。激動の2011年が去り、平穏な2012年になることを、皆様祈念されたことと思います。新しい年明けにあたって、東日本大震災で犠牲になられた方々に改めて心からの哀悼の意を表し、被災された方々・地域の1日も早い復興を祈念致しますとともに、本年が会員の皆様にとりまして、幸多き1年となることをお祈り申し上げます。

激動の最中に会長職を引き継ぎ、学会としての様々な対処にまい進しておりますうちに、はや半年以上過ぎ、一般社団法人への移行なども含めて、節目をまとめる時期となってしまいました。1,000年に一度といわれている様々な事象を糧に、本会がどのように進化していくかが問われており、残された任期中は、学会をどの方向に向けるかに集中したいと思っております。

3.11を開始時点とする激動は、まず、「ICTが役に立たない」という大合唱から始まりました。本会も鼎の軽重を問われ、その対応に東奔西走致しました。昨年10月CEATECで、「災害を乗り越えて：安心・安全でスマートなICT社会構築へ」と題する本会主催の大掛かりなシンポジウムを行い、各界の第一人者による検証を世に問うて、それなりの責務を果たすことができましたこと、関係の皆様にご心から御礼申し上げます。

このシンポジウムを通して、人はもちろんのこと、海も山も動植物も瓦れきもそして地球全体も、それぞれ発信をしていること、そして、それらの発信を真摯に受け止める姿勢・体制並びに技術が、すぐに使える状態に整備されていなかったことが、多くの悲劇を生み出してしまったことを、我々は学んだのだと思っています。

被災地復興の遅れに対する怒りの声、種々の不具合を検証するためのセンサの不足から始まって、20世紀後半から顕著になり出した、絶滅種の泣き声、異常気象災害の爪痕、宇宙船地球号のうめき声など、目に見・耳を傾け・体感するべき発信が山のようにあることに、皆様もお気づきのことと思います。

最先端ICT技術を使えば、これらの発信を捉え、処理し、そして対処することは可能なはずであり、これらの活動の上にもこそ、安心・安全が築かれると確信しています。しかし、それだけでは足りません。そよ風やせせらぎの中、そして森羅万象が発する「声なき声」を捉え、「見えない事象」を可視化し、過去からのメッセージを教訓として、未来への対処を行わなければ、真の安心・安全は得られません。

20世紀までの「ものづくり」の積み重ねの中で、我々は全ての発信を捉えるための、基礎的ICT技術を培ってまいりました。しかし、発信を全て捉えたとしても、その全てを「和」して、次代への指針に変えることができなければ、我々の前に未来は開けません。技術の可能性について、更なる磨きをかけることはもちろんですが、社会制度や人間心理面も加味した「知力」を結集しなければならない局面に来ていると考えています。

幸いにして、本会は、「知力を形に」する全ての要素を内包しています。人対人、人対機械、人対社会、人対自然、人対地球、人対宇宙、これら全ての関係において「和」を紡ぎ出し、その「和」をもって真の安心・安全を、地球上の全ての命が実感するための活動を本会が各界との協調のもとに行うことが、「日本がんばろう」につながると期待しています。21世紀を「和」の世紀とする第一歩を踏み出すために、新しい年を会員の皆様とともに頑張っただけでなく、ゆきたいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。